

先天性心疾患児の精神発達に関する研究

研究協力者 庄 司 順 一 (都立小児保健院)
松 尾 準 雄 (")
中 村 孝 (静岡県立こども病院)
永 沼 万寿喜 (国立小児病院)

はじめに

先天性心疾患児の身体発達に関する研究は数多いが精神発達と親の心理的特徴についての研究はほとんどない。そこでわれわれは先天性心疾患児およびその親に対して、心理面接および諸種の心理検査を行ない、患児の発達の特徴と親の心理的特徴を明らかにし、養育指導上の参考資料を得ることを目的とした。

対象と方法

対象は先天性心疾患児20名とその親で、年齢は1カ月～11才6カ月。診断名はファロー四徴7例、心室中隔欠損6例、共通房室孔残遺2例、肺動脈狭窄1例、冠動脈異常1例、全肺静脈還流異常・先天性僧帽弁閉鎖不全術後各1例、動脈管開存術後再開通1例である。心室中隔欠損2例と共通房室孔残遺1例はダウン症候群の合併があった。面接・心理検査は外来来院時に30分～1時間かけて行なった。患児の年齢・発達程度により面接時必要な心理検査を選択した。

面接：生育歴、家族構成、病歴および現在の状態について調査し、年長児には「3つの願い」について尋ねた。

心理検査：①子どもに対して、年少児には津守稲毛式「乳幼児精神発達質問紙」あるいは遠城寺式「乳幼児分析的発達検査」を用い、年長児には知能検査として、田中ビネー検査あるいはWISCを、発達ならびにパーソナリティ検査には、ベンダー・ゲンタルトテスト(BGT)、人物描画法を行なった。②親に対して、不安尺度としてMASを、親子関係検査として親子関係診断検査を用いた。

結果と考案

1) 発達について

発達検査を施行した3才未満11例(ダウン症候群を除く)のうちDA-100以上5名、100未満が6例であった。例数は少ないが非チアノーゼ群が精神発達が良いようである。発達が良好であるものも遅滞している例も領域別にみると「運動」が遅滞する傾向がみられた。また9～11才3名中2名では学業不振が認められた。この3例はいずれも乳児期に重篤な心不全症状があり緊急手術を受けた例であり、術後も不整脈残遺、心不全管理を余儀なくされた子どもで、学業不振の一因はそこにあるかもしれない。

2) BGT、人物描画法について

9～11才の3名中、学業不振の2名はBGT、人物画の得点が年齢以下であった。学業成績のよい1名は年齢以上の得点を示した。しかしこの例(僧帽弁閉鎖不全術後)の人物画は「3つの願い」で述べた「みんなと同じように体育ができるように」ということを反映してか、ミニスカートを着た活発そうな女性像であった。

3) 3つの願い

11才の2名の女兒に「3つの願い」を聞いたが、1名は前述のように「みんなと同じように体育ができるように」と述べただけであり、他の1名は①いっぱい食べて太る。②背が高くなる。③何んでもできるように。ということであった。わづか2例ではあるが、これは同年令の一般の子どもの願いとは異なっているようで、心疾患児には身体あるいは運動の状態を改善して欲しいという強い願いをもっているものが多いと予測される。

4) 親がみた子どもの性格

11例の親が子どもの性格について述べたが、これらを整理すると①甘えんぼう、②わがまま、気が強い、激しい、③小心、慎重、内気、内弁慶、神経質、おとなしい、④明るい、に分類できる。「明るい、活発である」に比し、他の極端でやや否定的ニュアンスをもった性格特徴が指摘されているといえる。これは親の養育態度が反映しているようであり、子どもを「大事」にし「甘やかした」結果、一方では「わがまま」となり他方では「内気、小心」という結果になったものであろう。

5) 心配について

9名のうち1名の親が「病気のことは医師にまかせている」と述べたが他の7名の親は「心臓病のこと」あるいは「身体のこと」。残りの1名は「結婚・出産」といった将来のことを挙げている。当然のことながら心疾患児の親はたえず心疾患の治ゆということが念頭にあり、心臓病と合わせて、発達遅滞(2例)、育て方(1例)を指摘したものがいた。

MASを施行した7例はいずれも不安の程度は標準あるいはそれ以下で、心疾患児の親が高い不安を持っているという結果は得られなかった。こ

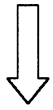
れはMASが判定しているのが、パーソナリティ特性としての不安であって、心疾患児をもった状況にもとづく不安を十分に反映していないためと考えられるし、またMAS施行時に患児についてさまざまな心配・懸念を抱いてはいても、それなりの状況に適応していたとも考えられる。もしも診断が下された直後もしくは手術直前にMASを行えば不安の得点は大巾に変るかもしれない。

まとめ

今回の調査では前述のような心疾患児の発達特徴と親の心理的特徴が示唆されたが、例数が少ないものと、年長児については手術後、今後も医学的管理を必要とする後遺症の残った例であり、今後の課題として、非手術軽症群、手術待期群、手術後遺症群に分類して検討する必要がある。さらに先天性心疾患治療計画の中に長期の心理面の配慮がなされないと心疾患児の精神発達に多大の影響があることを念頭において養育指導を行うべきだということを附記しておく。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



はじめに

先天性心疾患児の身体発達に関する研究は数多いが精神発達と親の心理的特徴についての研究はほとんどない。そこでわれわれは先天性心疾患児およびその親に対して、心理面接および諸種の心理検査を行ない、患児の発達の特徴と親の心理的特徴を明らかにし、養育指導上の参考資料を得ることを目的とした。